

北米インディアンの生活 (9)

—23部族の伝承と習慣—

エルシー・クルーズ・パーソンズ編著 神徳昭甫訳

VII 太平洋岸部族

VII-1 ^{シェルマウンド・ピープル}貝塚人¹⁾のウイクシ

浜辺で

「あったよ、あったよ、ほら、ここにも！」

三歳くらいの素裸の幼児が、足下の滑らかな波打ち際の表面にできた小さな穴を指で示しながら興奮した声を上げた。

「はい、はい、今、行くからね」と、数歩離れたところから優しい愛情に富んだ、女性の声が答える。

「でも僕、もう、ハラペコなんだよ」それでもまだ、不機嫌そうな声が返って来た。

「あのね、そこにはもう、ハマグリはいないから、印しをつけて他のところを探してごらん。すぐにお家に帰りますよ！」

これを聞いた子どもは前屈みになって、先を鋭らした骨の破片でその穴の周囲に円を描くと、濡れた渚の上をパタパタと駆けて行った。

まもなく母親がやってきた。片手に粗末な籠、もう一方の手には短い、先の尖った太い棒を下げている。裸足で無帽である。身に着けているものは、腰から膝までを被う、樹皮から作った緩やかなスカートのようなものだけだ。太くて光沢のよい黒髪が、二本に撚り合わされて体の前に垂れ、胸の双丘を僅かに覆い隠している。彼女の顔は子どもよりも黒いくらいで、赤黒

1) the Shellmound People. 白人が入植して始まったアメリカ史の初期の時代までおそらく三、四千年間にわたってサンフランシスコ湾岸に住み着いていたと思われる、貝塚人はコスタノ語族(Costanoan)に属していたと考えられている。コスタノ語族は、カリフォルニアの二つの地域、ゴールデンゲイトから南のソールダッドに及ぶ一帯と、太平洋岸から東のサンホーキン川に延びる一帯を住居としていた。その主要語族としてムツ族(Mutsun)があり、本編の主人公ウイクシ(Wixi)のアカラン村(Akalan)はこの部族に属している。また、このコスタノ語族と近縁の関係にあるのがミウォク語族(Miwok)である。これらの人々の生活は当然、漁労や狩猟に拠るものであったと推測されるが、貝塚に関する歴史的文献も、また考古学的な証拠もほとんどないようである(原著Appendix 407)。なお、ムツ語は1940年以降死語となったが、ミウォク語は人口300のうちに話者がいる、とされる(アシャー/モズレイ13)。

い焼きレンガ、というか、ある種の銅のような色合いである。年齢は二十歳になるかならないかくらいで、端麗な容姿の持ち主だ。

この若い女は、子どもが示した場所に来ると籠を下に降ろした。それから両手で棒を握るや固い浜辺の泥濘にこれを刺し込んで、器用にもたった一度だけでかなり大きなハマグリを掘り起こした。それを掴んで既に何個かは入っている籠の中に放り込み、子どもがまた呼んでいるところ足を向けた。

ごく近くで似たような光景が繰り返されていた。全部で百人近くにもなるであろうか、約半マイル²⁾の長さあるこの浜辺のあちこちに母と子どもが散在していた。100ヤード³⁾くらい向こうにも別の、やや少数の集団が見られた。どちらの集団でも母親と年長の子もたちは、棒で貝を掘り出すのに余念がなかったが、まだ年端のいかない子どもはハマグリを潜んでいる場所を探して浜辺を走り回っているのだった。まもなく、引いて行く波の水際で奇妙な水しぶきが上がった。この飛沫が一度ならず繰り返されると同時に、一斉に叫び声が上がった。

「ウイクシだ、ウイクシだ！」(アカエイだ、アカエイだ！)

十人以上の、まだ幼い子どもたちが四方八方から駆け寄って、みんなが大声で怒鳴っている、「オレのもんだよ！ オレが真っ先に見つけたんだ！ いやボクの方が先だ！」

海水がいつになく濁っている水際のごく狭い場所以外では、実際にはまだ何も見えていない。子どもたちは、水が巻き返って濁っているその部分は避けて一斉に海中に飛び込んだが、そこだけを遠巻きにするようにして並び、棒で突き始めた。程なくもう一度大きな飛沫が上がると、大きな奇怪な生き物が、浅瀬から身体を持ち上げてほとんど全身を現した。

「ウイクシだ！ ウイクシだ！ 逃がさないぞ！」と一斉に声上がる。「逃がすもんか！」

海水は着実に引いて行き、間もなく彼らの興奮の原因が明らかとなった—特別に大きいイーグル・レイトビエイ、一種のヒラメのような奴で、外見は巨大な蝶のようでもあり、加えて鞭のような尾を持つが、その付け根あたりには人に手酷い傷を負わすこともある、鋭い枝角の骨の突起が見えている。このウイクシ、姿は醜く、2, 3インチ⁴⁾の水深でやみくもにパタパタと悶えながら、尾を横に凄まじく打ちつけるために、子どもたちは、棒を海底にしっかりと突き差して柵のようにこれを取り囲み、被害の及ばないようにして立っているのである。しかしいったんこの怪物が沈むや否や、全員が、あたかも吠え叫ぶ鬨犬の群れのように、突進しては棒で打ち、叩き

2) a half mile. 約800メートル。

3) a hundreds yards. 約91.44メートル。

4) two or three inches. 約5～8センチメートル。

のめすのであった。最後にこの子どもたちの中の最年長の、十か十一くらいの少女が、四苦八苦してこのエイの目に引っ掻き棒を突き刺した。二、三度、断末魔のあがきを見せたあと、とうとうエイは静かになった。

少女はこの巨大な魚をしっかりと釘刺しにしている、その棒に身体を預けて突っ立っていた。他の子どもたちは近づくとして群がったためにぶつかり合い、倒れてしまうのもいた。それぞれが棒を死んだエイの身体に突き刺して引きちぎろうとした。しかし彼らの力は余りにも弱かった。中には、ねばねばするその死体を指で掴んで引っ張ったものもいたが、効を奏しなかった。少女が磐石の姿勢で立ったまま、そこにいたからだ。

何人かが、怒っていきなり彼女に突っかかっていった。身を守ろうとして彼女が棒を離すと、同時に巨大なエイの身体は引き離されたが、しかしそれは当初に所有権を主張した連中の力によるものではなかった。この騒動の間に十三か、十四歳の少年が、潮干狩りのもっと多数の集団からそっと抜け出して、手で二、三度、尻尾を振り回したためであった。少女の棒が離れたために、彼はエイをぐいと引き寄せ、滑りやすい砂の上を大きな図体の魚を曳き摺りながらも自分が属する集団へと一目散に駆け出した。

凄まじい罵声が起こった。何人かの子どもが追い掛けたが、すぐに引き離された。エイを殺した少女は何が起こったかを理解して叫んだ。「私のウイクシだ！ 私のウイクシを取ったね。おまえーウイクシ、おまえー」その声は咽び泣きが変わった。しかし彼女の最後の言葉は、ハマグリ取りの両集団カウィナ⁵⁾とアカラン⁶⁾の人々の間で取り上げられてコーラスとなって沸き上がった。「おまえーウイクシ！ おまえーウイクシ！」

しかし少年は意に介さなかった。無事に岸までたどり着くと、エイの尻尾を片手に二、三周巻きつけると、その巨大な身体を肩越しに担ぎ上げ、家のある方に向かって沼地に生える叢の中に消えたのである。

ウイクシ！ ウイクシ！ こうしてこの少年は生涯その名で呼ばれるようになった。

朝食で

サンフランシスコ湾の朝はまだ早い。潮は引き、東の丘々の真上に達した朝日が大きな円い

5) Kawina. Kawai, Gawiaとも綴る。アカラン部落と同様にサンフランシスコ沿岸を本拠とする部族の一つでホタルイ草のボートに乗り、貝塚を築くが、出自は明らかでなく、後出するようにアカラン部落の属するコスタノ語族ではなく、ポマ（ポモ、Poma, Pomo）語族（アカランから“地底人the Earth People”と称されている）に分類されるが、しかしポモ語族ではなく、ヨコツ語族（Yokutsan Family）に属するという説もある（Shipley 89）。なお、コスタノ、ポマ、ヨコツはすべてペヌーティ大語族（Penutian Stock）に属する。

6) 本注1参照。

鏡のような静かな海面に映っている。ハミルトン山の冠雪を照らす陽の光は、湾の海域の彼方、水平線に落ちてギラギラと光炎を上げている。北には、ディアブロ山のかすんだ姿が浮び上がり、また右手には、北のパブロ湾に向かう広い水路チャネルの入り口を守る、緑のタマルペ山が、白光に包まれて赫奕かくえきと聳え立っている。この水路の海面がやや波立っているのは、内陸の山々や谷からの水を排する大河がここで合流し、集った水を一齐に海へと注ぎ込んでいるからである。この海岸は低い沼沢地となって緩やかに彎曲している。この曲線をたどっていくと、影の落ちた丘陵を背景に、ところどころ薄青い煙りが立ち登っている。これらの煙は集落の存在—この海岸全体で約二百戸がネックレスの真珠のように連なり合っている—を示しているのである。

この湾を成す幾つかの入り江の一つの、海岸線から300ヤード⁷⁾ばかり引きこもった沼沢地の中の灰色ずむ地点から煙りが昇っている。これがカウイナ部落である。東に4マイル、海の間際に位置するのがアカラン部落だ。その向こうで海岸線は曲がるが、真水の小川が湾へと注ぐ地点の所々で、他にも幾つかの集落が岸辺にしがみつくようにして点在している。

この潮干狩り（ハマグリ掘り）の人々が思い思いに家に向かって浜辺を歩いている。アカラン部落の若者数人は、数ロッド⁸⁾離れた入り江の岬まで行っていた。牧場地ボトレロの東側、その麓全体に沿って延び広がる広大な沼地の水を排する、あの潮流タイド・チャネルへと続くぬかるんだ斜面から、乾燥したホタルイ草⁹⁾を束ねて造り上げた十数個の「ボート」を引き摺り降ろそうとして今、彼らは懸命になっていた。ハマグリ掘りが家を出るときは干潮だったが、潮は既に満潮に近づいているから、朝飯を持ち帰る人たちを全面的にバックアップしなければならないのだ。

騒々しいとは言わぬが、活気溢れる場面ではある。年長の少年らは、ヌルヌルした泥の斜面から海水の中に滑り落ちてバタバタしながらも大笑いしたり叫んだりしている。籠を抱えた女たち、それと、ごく幼い子どもたちだけが、ボートで渡るのだ。このホタルイ草のボート、いや筏フロートに乗って。四人から六人しか乗せていないのもあれば、十五人も乗せているのもある。この渡し船は、女たちの賑やかな話声に合わせて、かなりゆっくりと進んでいる。子どもたちは村へと続く草の繁茂する斜面を我先にと登って行く。

イ草は、村のある黒ずんだ高台の麓で突然終わっている。この丘の高さは20フィート、外形は不規則である。つまり、斜面は所々緩やかだったり、険しくなったりしており、頂上はほぼ平坦である。もっと近付いて見ると、全体の塚のような構造は、ハマグリ、イ貝、牡蠣などの殻から出来ているようなのだ。所々、鮮やかな色のアワビの殻もある。あちこちに何対か鹿

7) some three hundred yards. 約270メートル（1ヤードは91.44センチメートル）。

8) a few rods. 2, 30メートル。（1ロッドは約5.03メートル）。

9) tule-rushus. Tuleはカリフォルニア州の沼沢地に多いホタルイの類の植物。
rushはイグサ、イ（藪）（研究社新英和大辞典2643, 2158）

の角が混じっており、家鴨やガチョウの翼骨、まだ羽毛の付いたその他の鳥の骨も散らばっている。つぶされたり、折られたりした動物の骨が辺りを構わずころがっている。魚の骨もある。蠅が群がって、なんとも言えぬ悪臭である。さらに仔細に眺めると、表面に罅が入った大石や小石がかなりあるのと同様に、灰や木炭もあるのが分る。巨大な灰の山であり、廃棄物の堆積という印象を受ける。しかもその上にこの村全体が載っているのだから！

この村落は約三十戸の、蜂の巣箱のような小屋が雑然と並んでいて、それぞれの家屋には南か北かどちらか一方に入り口が付いている。家自体は直径12、3フィートの円になるように並べられた細い柱の骨組みの上に建てられており、地上8、9フィート辺りで柱の先端が曲げられ互いに交差している。この上に小枝や草などが重ねられて、さらに土や、芝で覆われている。この屋根のみ、煙り出しのための穴が開けられている。しかし今朝は、それぞれの家に備えられている竈の火が、家の外、戸口の前に出されていた。

かなり大きい丸石が何個か、消えかけた燠の周囲に円形に置かれている。このそれぞれの円から手の届くくらいの間隔を取って周囲におのおのの家族が並んでいる。通常は婦女、子どもとはわざわざ一緒に食事しない老人の姿も見える。多くは白髪で髪に櫛を入れたこともなく、目からは^{めやに}目脂を取る時間もないかと思われるほど、むさ苦しい様子をしている。雨期の数ヶ月はあまり働かず、女たちが仕事をするが、しかし今は四月だし、春の陽気が彼らを冬眠から連れ出したのである。やがて来る夏の期間にはずっと外に出て、海辺ほど簡単には手に入らないが、男たちのみでなく全員で働けばはるかにその食料の種類が多い山中で活動するようになるであろう。浜辺から運ばれたハマグリが配られ、老人らが、火の傍で熱せられた石の上に今日にするように置いたのである。まだ年端もいかない子どもたちは、じっと、しかし落ち着かない様子で眺めているが、実はジュージューと音をたてる、一番近くの貝に手を出して既に何回か叱られたというわけなのだ。突然、ハマグリの中の何個かの口が開いて、食べれるようになった。貝の中の海水に浸かったままのハマグリを煮て食べるのが最も旨い料理法なのだ。並んだ小屋のほぼ最後尾のあたりで、その火を囲む人の環は非常に高齢な老人が一人、中年の婦人が一人、二人の子ども、それに、もうそろそろ成人にも達するような一人の若者から出来ていた。これが例のウイクシィ青年で、彼はいま母親に、ついでに取ってきた魚も一緒に煮ようではないか、と提案したところである。

「煮魚だと！なんと煮魚だと！ そんなの聞いたこともないぞ！」老人が唖れた声で叫んだ。その鈍く、落ち窪んだ目から判断して彼は、もうまったく目が見えないか、あるいは半盲状態なのだろう。ぼうぼうと生えた顎の鬚と同様、髪も真っ白で、顔や首筋は縫い合わされたように皺が寄り、鞣した鱗革を想わせた。身体は細く、衰弱して両手は震えていた。

「いや、魚だって煮て食べるんだ」とウイクシィが言い返した。「ドングリも煮て食うし、トチノミも、その他色んなものも煮て食べる。なんで魚だけダメなんだ？」

「なぜ魚を煮てはいけないか？ なぜ魚を煮てはいけないかだと？」老人は金切り声をあげ、全身を震わした。「魚を煮ていけないのは—それは、誰もそんなことはしたことがないからだ！**チャカイ**¹⁰⁾もそんなことは教えなかったぞ！」

大人としての責任を引き受ける**加入式**^{イニシエーション}にこの少年が参加していらい、この種の議論はもう何ヶ月も毎日のように繰り返されていた。**ウイクシ**がいつも言うように、父親は不在であった。シャーマンであった父は、ある族長が毒蛇に咬まれた傷を治療できずに行方をくらまし、追跡され待ち伏せに会って果てた。それいらい、一家は不当にも恥を堪え忍ばなければならなかったのである。

それが数年前のことで、いらいこの少年は幼いころから自活の境遇に置かれて、数々の新しい工夫・手段を実行して難関を潜り抜ける術を獲得してきたのだった。棒を真直ぐ立てて帆柱にし、その上に草の箆を載せて帆としたことで、あのホタルイ草のボートを彼のみが早く走らせることができた。しようと思えば他の若者だって彼の真似ができたかもしれないのだが、しかし彼らには、すぐ上に権力をもつ目上のものがある、阻止されたのである。しかし**ウイクシ**は、この村では既に一種の村八分の境遇であったし、耄碌した祖父は、もはや彼を制止できる状態ではなかったから、思い通りのことができたのだった。

今度の場合、**ウイクシ**は、老人と言い争うことはしないで、火から十分距離を取ったところに置いてある、ほとんど空っぽの籠の中に素早く両手を突っ込んで、水が滴り落ちる小石を四つか五つ取り出した。それらを片側に投げ捨てる、二本の棒を箸代わりに使って、火から焼け石を何個かつまんで一つ一つ籠の中に落として水を半分に増やすと、ひとしきりの間ジュージューと蒸気が立ち昇り、籠の中の水が沸騰し始めた。**ウイクシ**は熱湯の中にトビエイの肉塊を幾つか入れて煮魚にするや、やにわにこれを食べ始めたのである。

ドレイクの通航

山から山へと一度ならず狼煙が上がり、これに対して**アカラン**部落ばかりでなく、湾岸に位置する二百の集落のそのすべてから応えがあった。あらかじめ返事の合図など取り決めてもない、この重大事とは1579年初夏、^{ザ・ゴールデン・ハインド}「**黄金の雌鹿号**」の**カリフォルニア**沿岸通過を指している。偉大な船長、**フランシス・ドレイク**¹¹⁾は深い霧のために^{ザ・ゴールデン・ゲイト}金門湾は見なかったが、**タマルペ山**の見張りが船を見つけて、彼らに出来る最善の義務を果たしたのである。その日の夕方前、

10) Chakalli. 後出するように「天上の人」(“Man Above”), 「天上の偉人」(“Great One Above”)としてこのアカランの部落で信奉される神格の一つ。「雷」のような自然の力を神格化したものらしい。

11) Sir Francis Drake(1540?-96). 英国の提督、地球を周航した(1577-80)最初の英国人。スペインのAmadaを撃破した(1588)。

湾のほとりの住民らは（海岸沿いの人々には肉眼で見えた）ワサカ、すなわちこのムツ族¹²⁾がまだ極北に暮らすところに最初の火を彼らにもたらしたあの鷺が通過するのだと理解した。

三、四週間後、この船が北から戻り、レイエス岬の内に修復のため着岸したとき、ドレイクの上陸したその場所に住むタマラーニョス、別名「尖った家」^{ピークド・ハウス}の人々からの飛脚によってタマルペ山に伝言が送られ、その結果、合図の信号が考案されたのである。このとき、ムツ族には、やって来たのは、ワサカではなく、偉大なチャカイイ自身であると知らされた。「天上の人」あるいは「偉大な天の人」を意味するチャカイイとは、彼らの思考の中で重要視されていたが、しかしこれを招くことは凶兆を意味することであった。その存在を前にしてほとんど誰もが逃げ出したいと思った。結局、この客人は穏やかな振る舞いに終始し、やがて立ち去ったあと、ムツ族の数名にまたとないほど有益な知識を残したのである。

今のドレイク湾は、当時、ムツ族とは異なる言語を離し、また大抵は領土権に執着するミウォク族の所有する土地にあった。しかし数人のムツ族は遠回りになるが海路を取り、ウイクシィもその中の一人だった。彼はアカラン部落から行ったただ一人の人で、この冒険が人生の一大転機となったのである。年長者は冷やかだだったが、少なくとも自分と同年齢の人々にとって彼は英雄として帰還した。ウイクシィは顎鬚を生やした白人たちと数日間滞在したこの期間、多くの驚異を学んだが、その中にはあの、船を動かすのによそから来た人々は帆を使うということもあった。もし誰かが彼の話の疑ったら、証拠を示すだけでよかった。つまり、手鏡とか、色つきのガラス珠の数珠、正方形の赤い布であり、とりわけ素晴らしいのは金属製のナイフであった。これらの品物は、ドレイク自身の航海日誌にも記載されているように、インディアンが儀礼として行った舞踊の一つが終わったあと、双方から贈り物が交換されたその折りに、この偉大な船長自身が彼に手渡したものであった。

ザ・カウンシル・ロッジ 集会所で

成年に達したころから既にウイクシィは部族全体を導き、改善する己の能力のみならず、個人としての自分の力と技倆を十分に意識していた。しかし己の時を待つことが必要だ、と覚悟をしていた。老人は若者にゆっくりと力を譲り、あるいは「消えて行く」ものだ。なぜ、争う必要があるだろう。それにことを急ぐのは彼の本質ではなかった。彼の忍耐力は、別のこと、例えば未婚だという、その事実にも現れていた。慣習では、両親が息子のために嫁を選び「買った」^{バーチャスト}。しかし彼には両親がいるわけではなし、すくなくとも片親である母は彼の助言を受け入れ、彼の権威の下に甘んじているため、事態はもっぱら彼一人に任されていたのである。実際には妻を娶るに相応しい行為を行っていた。つまり、自分が選んだ娘の家に食べ物や衣類

12) 注1参照。

の毛皮を送ったし、当の娘もこれを受け取っていたのである。それでもまだ彼女を家には連れて来てはいなかったのは、この娘が隣村の**カウina族**のものであるために、彼の村では結婚相手として認められなかったからなのだ。この娘は、彼に綽名を付けたあの少女だった、そう、彼にアカエイを奪い取られたあの娘だったのである。

現在**カウina部落**のものは、**アカラン部落**と友好関係にはない。それでも**ウイクシ**は浜辺や山で**マウダ**と何度も会って、どうやら二人は仲直りして恋人同士なのだった。

ウイクシは随分待ったが、しかし彼の期待に反して村の人々の彼に対する感情は相変わらず厳しいものがあつた。確かに以前に比べて権力とか権威が彼に備わってきた。しかし長老らの厳しい反対が効を奏していた。若い世代には敬愛を受けていたが、誰も公の場所で彼に味方するものはいなかった。絶えず集会で老人たちと会い、彼らも十分彼の主張に耳を傾けたが、彼が旧来の陋習を離れたことを提案するときは必ず断固として反対するのであつた。

ある晩のこと、この**アカラン部落**の「集会所」の中央の小さな炎には**ウイクシ**と、いつも以上に険しい顔つきをした十人ほどの老人の姿が映っている。パイプが車座になった人々の間に廻り¹³⁾、**戦時族長—ウイクシ**を除けば一番の年少者である—がこの集会の主旨を述べているところである。

「^{フォア・メニー・ウインタース}もう何年間も」と天井に目を向けて彼は話している。「もう何年間も我が部落は将来のことで思い悩んで来ました。どうすべきか分かりません。白人がこの土地にやって来た。最初彼らはワサカだと思われましたが、その後で**チャカイ**とされました。しかしそうではなくて彼らは手強い敵なのです。我らには何の危害をもたらしてはしません。それはいいのです。我らの敵を殺し—^{ロング・ヘヤーズ}ムツ湾の南の**長髪族**¹⁴⁾のことです。それはいいのです。隣の**ミウオク族**からは略奪しています。これもまた、結構です。しかしいつの日か、空に雲が高く漂うとき、連中は**ムツ湾**に至る水路を見つけて、我々を殺したり、奴隷にしないという保証があるでしょうか？」

真剣な面持ちで周囲の人は一斉に頷いたが、一人だけ長老の面々の正面に坐っている**ウイクシ**の方をこっそり盗み視るものも何人かいた。

「こうした状況では」と話し手は言葉を続けたが、今度は真ん中の一人の長老の方向に鋭い視線を向けていた。「こうした状況では、^{ピース・チーフ}**平時族長**の**カカリ**の方から我が部族の**アワー・ピープル**の昔物語をお話しいただいた方がいいのではと考える人が我々の中にもいるのでして。つまり過去の体験から

13) 車座になった人々の間で廻し嘸みされるパイプはピース・パイプとも言われた。これは会議に入る前の一種の儀礼行為として先住民が行った慣習であり、和平や合意を象徴するものであつた（阿部 145-6）。

14) Longhairs. 詳細は不明。

何が未来のために一番いいか判断するためです」

ウイクシィを含む出席者全員が頷いたので、よぼよぼの老人、**平時族長カカリ**がゆっくりと、また慎重に言葉を選んで話し始めた。

「**ムツ族**の昔話は」老人は口を切った。「長い。全部話せば幾夜もかかる。だから過去の事件とか、これから**偉大な天の人々**がわしらに期待していることを二、三話そうと思う」

「そうだ、そうだ。何をわしらに期待しているかだ」聞き手が唱和した。

「むかし」老人は続ける。「**ムツ族**が初めてこの海に来たとき、貧しかった。遠い北の方から裸足でやって来たのじゃ。ボートもなく、弓矢もなかった。**ワサカ**が火を運んで来て、貝掘りの棒もくれた。あるのはそれだけだった。わしらの先祖はまず**原古アカラン村**^{オールド・オールド}で暮らすようになった。そのころ、そこは島ではなくて、いまわしらのいるこの西側を守る長い**ムツ山**の一部だった。で、そちらにいる頃に**チャカイ**ィが来た。**偉大な天の人々**がよこしたのだが、一緒にボートと弓矢を、パイプやその他、色んなものを持っていた。これらを**ムツ族**への贈り物とし、その使い方も教えた。だがこのあと、**コヨーテ**が来てそれとは違う使い方を教えたので**チャカイ**ィは腹を立て、**原古アカラン村**を貝掘り棒で打ち、稲妻を投げつけた。それから村がなくなったのを惜しんで傍の山から大きな部分を叩き落とした。大地が震動し落とされた塊が山に当たってその山を**ムツ**海中に落してしまった。そこから海水は太平洋にも届いたが、**ムツ湾**の水位は高くなり山の中にできた穴を通り抜けた。こうして**原古アカラン村**は島になった。山から叩き落とされた部分も島になって、これが今の**ムツ島**。わしらの若い衆が、アワビ採りの際に潮の出を待つ休息所になっている。**チャカイ**ィはそれから姿を消したが、**偉大な天の人々**の元には帰らなかった。それは、ときどき大地が震えることから、他に誰か命令に背いたものがおると分るからじゃ」

ここで**カカリ**老人は言葉を切った。これで**ウイクシィ**にはなぜ会合がもたれたか、その理由がわかった。しかしまだ彼は話を聞かねばならない。

「**チャカイ**ィがいなくなると」**カカリ**は続けた。「**ムツ族**は移動しなければならなかった。小さな島の周囲の浜は必要とするほどのハマグリが取れなかったからじゃ。それにまた、薪にする流木も以前のように村の近くに届かなくなった。全部**チャカイ**ィが作った新しい水路を通してむこう岸の、わしらの隣人、**地底人カウイナ族**のところへ流れ着く。それで当時の**平時族長**が、**ワレン**というのがその名前じゃが、**カウイナ**のところへ行くように勧めたが、彼自身は**原古アカラン村**^{オールド・ビープル}の**先人**らと一緒に残った（つまりそこで死んだ）ので、**チャカイ**ィが持って来た多くの物はみんな彼と一緒に残っている。明日にでもわしらは、**原古アカラン村**へ渡って見てこなくちゃなるまい」

「**ムツ族**は弓矢でもその他、何でも同じで、すべては**チャカイ**ィが持って来た物を真似たものだが、もう他にも何艘か舟を作っていた。だから、**カウイナ**まで渡るのはなんて事はなかった」

「カウinaのところでは、万事うまくいっていた。それから、もう一度騒動が起こった。コヨーテが北から籠を持ち込んで、そいつを湾を渡ったタマルペ山のミウオク族のあの若い女にやったんじゃ。その中に食べ物を入れて煮ることを教えた。みんなはやってみて気に入った。このあと、ミウオク族は、新しい弓の材木さがしに来ていたカウinaの若者数人にこれを教えた。すると、チャカイイはこれらすべてを耳にしていたんだらうな。大きく白い翼の船でやってきた、あの鬚面の男たちが下りた、その近くの大地を激しく打ちすえたからじゃ。チャカイイの一撃は大きく、深い割れ目を大地に穿ち、太洋から水が入ってきてこれを満たしてしまった。今、そこを目にすることができる。そのとき高い水が押し寄せてカウinaの村にいたムツ族の多くは溺れ死んだ。今わたしのところみたいに高い塚を築いて暮らしていたんだがな。水面上に覗いていたのはただ貝塚の頂上だけだった」

「このあとすぐムツ族はカウina—あるいは当時は^{オールド}旧アカランと言ったが—を出た。多くは東や南に行き、ムツ湾の周囲で新たに家を建てた。わたしの先祖だけがここに来て、以来ずっとここがわたしの村となった。これが原古アカラン族と旧アカラン族の昔話じゃよ」

カカリ老人は力を使い果たしグッタリとして壁に凭り掛かった。しかし間もなく話を続けた。「ここに来て長いことすべては順調だった。みんなが年寄りの言う通りにしたので、チャカイイも喜んでいたんだ。ある日、大地がまた震えてカウina村、あるいは旧アカラン村の周囲から水が引いた。わたしの先祖は、もう一度ご先祖の近くに戻れるようにチャカイイがお膳立てしてくれたものと考えた。じゃが移動する前にコヨーテが、今カウina村に定住している地底人を連れて北からやって来た。煮炊きをする籠と、魚を取る網も一緒に持って来た」

このとき、聞き手は怒りや苛立ちのあまり唸り声を上げ、その食いしばった歯からは息が迸り出た。ウイクシイのみが膝の上で肘を抱え、顎を両腕に乗せたまま、黙っていた。

カカリ老人は残る力を振り絞った。「地底人、ポマ族は北から来た連中で、本来この者ではない。わたしの言葉を話す者もいるが、わたらと同族ではない。初めのころは彼らと闘ったが、コヨーテの方がチャカイイより狡賢かった。今は互いに平和に暮らしているがしかし、むこうの女とは結婚しないし、むこうもそうしている。わたらは隣人ではあるが友人ではない。あした、あちらに行ったとき、今わたしが言ったことが証明されるじゃらう」

しばらく沈黙が続き、老人は再び背中を壁につけて、まるで眠ったように見えた。誰も何も言わなかったが、次々に立ち上がって集会所を出た。外は夜、深い闇の中で物音もなく、ただ湖沼の草叢を渉る風の溜息のみが聞こえた。

証拠

夜が明けようとする頃、大きなホタルイ草のボート一艘がサン・プエブロ牧場の南端をなす高く尖った崖から離れて真直ぐブルックス島に向かっている。櫂は素早く動いてたちまち船は

視界から消えた。そのボートには一人を除いて**集会所**にいた人々の全員が乗っていた。**ウイクシ**はいなかった。ボートはまだ暗いうちに**アカラン**部落を出たので、漕ぎ手たちは尖った崖まで岸に沿って行き、そこで島が見えるようになるまで待たねばならなかった。彼らの仕事は^{ミッション}秘密だったので、故郷の村からは見える心配がないのは幸이었다。

小舟は大きな岩の背後を滑るように廻ると次の瞬間、この岩と、当の島を繋ぐ低く彎曲した砂州の上を擦るようにして乗り上げた。砂浜に下りると、漕ぎ手一人を乗せた小さなボートが薄暗い北の方から近寄ってくるのが見えた。漕ぎ手は島には数ヤード¹⁵⁾近いこの砂州の反対側に下りた。**ウイクシ**である。彼は岩陰になる砂州の南側の斜面までボートを引き寄せ、もう一艘のボートの傍に並べた。これは**アカラン**もしくは**カウィナ**の目敏いものによって、この島に誰かが上陸したことを知られるのを警戒したからである。

戦時族長を先頭に全員が浜辺までは都合良く斜面になっている島の北西の端まで数ロッド¹⁶⁾歩いた。北岸まで進んで、それと分るほどはっきりと地面が隆起しているところから東に向かい、トチノキが群生しているところへ足を運んだ。背の高い草や雑草がその場所を覆っていた。それは**原古アカラン族**が残した塚であった。ここに**マツ族**の最古の祖先の骨が眠っているのである。

頂上を過ぎたところで**戦時族長**は、トチノキの老樹が二本植わっている方向に一本の線を見つけて、**ウイクシ**をその線上に立たせた。彼より年上の者には坐るように指示した。自分自身は二本の樹のすぐ傍まで素早く歩いて行き、しっかりと歩幅を測るような足取りで**ウイクシ**のところまで戻って来た。歩きながら指で歩数を数えていた。塚の東斜面を下って中間点あたりで急に足を停め、大きく頷いて見せて全員こちらに来るようにという動作をした。そのうちの一人から穴掘り棒を受け取り、自分が立っている位置の周囲に大まかな円を描いて言った。「ここだ！掘れ！」

高い草の陰で少し身体が隠れるように彼らは膝をついたままで、誰も立ち上がろうとしなかった。もう日が昇ろうとしていたのだ。それぞれが棒で土を崩したり、大きなアワビの貝殻で、均された土を掬った。こうして直径5、6フィートの大きな穴が出来た。やがて2フィートあたりの深さのところに、腕と脚をしっかりと身体まで折り曲げた成人の骨が出て来た。全員が息を殺しながら喝采した。骸骨に続いて、ある種の動物の骨で作った千枚通しとか針と一緒に、臼や、すりこぎなどが出て来たので老人たちには、これは女性の遺骸であることが分かった。この女が使用した道具の^{スピリット}霊は亡き人の霊と一緒に、はるか**西方**の新たな住居に行った、と言われたものである。

15) a few yards. 3,4メートル。

16) a few rods. 2,30メートル。

更に深く掘っておそらく5、6フィートも下のところにもう一体の人骨が出て来た。その胸の上あたりで大きく美しい黒耀石の刃を掘り出した。肩の近くに矢の柄の木製部分が朽ちたあとそのまま残った、鍬が数個見つかった。片腕の近くには非常によく磨かれた凍土で造ったパイプが二本並んで置かれていた。頭蓋骨の両側に虹色のアワビの殻からできた円盤型の耳飾りが、また首や両肩の周囲にはハマグリ製のビーズが沢山あった。穴掘りに当たった部族員はみな、異口同音にこれは誰か偉い人の遺骸であろうと言ったし、**戦時族長**もまた、かつての**戦時族長ワレン**その人のものだと言った。しかし年輩のものらはみな、伝説によればワレンは**原古アカラン族**の住民が残した黒ずんだ塵芥の中ではなく、もっと下の**処女地層**^{ヴァージン・ソイル}に埋葬されたのだと主張してこれに異を唱えた。

屋間を通して穴掘りは続き一男、女、子供たちの遺骨が次から次へと発掘された。それぞれはもともと死んだときの小屋の床下に埋められたものだが、時を経て貝殻や灰がその骨の上に積み重なってまた新たに家が建てられ、次々と死者が埋葬されるうちにやがて廃屋となったものであった。

さらに下へと掘り進むうちに死者の身の回り品は段々少なくなって、何か見つかったとしてもそれは未熟でとても完成品とは言えない代物ばかりになった。もはやパイプも、美しい黒耀石の刃も、立派な象牙の千枚通しも針もなかった。これはいったい何を意味するのであろうか？ 初期の祖先はこうしたものを持っていなかったのか？ こうした思いが穴掘り人の胸の中を確かに去来したし、殊に**戦時族長**の胸を行き来したのである。なぜなら、彼は突如として「これは違う」と言い出し、「今掘っているこの場所ではない」などと断言したからである。しかし老人らはただ微笑して相手にしなかった。

日の暮れる寸前、遂に貝塚の層が尽きる徴候が出た。土層が現れ、間もなくそこから人骨が出土し始めたのだ。直後に完全な人骨が現れた。道具や装身具は見つからなかったが、全員の注視が、この骸骨が伸ばした右腕の辺りの真っ赤な斑点の上に注がれた。それは多量の着色の粉でこれまで見つかった何体かの人骨にも共通するものであった。今や明らかに興奮状態にある**戦時族長**は先が鋭く尖ったアワビの貝殻を掴むや、しきりにその赤い物体を掘り始めた。次の瞬間、彼の手から貝殻が落ちた。彼も、他のものもみな呆然と七個の大きく美しく透明な石英の結晶—**ワレン**の全財産を眺めていた…。

朝だった。死者たちの亡骸は元に戻され、掘り返された痕跡もすべて消し去られた。**原古アカラン**の先人らよ、海に洗い流されるまでは安らかに眠りたまえ！**ウイクシ**は激しい労働のあと、身体は疲労困憊していたが、精神は生まれ変わったようだった。彼はこの墓から何かの証拠を掴んだのではなかったか？ 確かに**ムツ族**の生命は過去の中にまだ生きているのを彼ははっきりと知ったのではなかったか？ そして自分はそれを未来において明らかにし発展させようと決心したのではなかったか…？

老人はみな夜通しの重労働のあと眠りこけていた。ウイクシィのみが、眠らずに夜明けを眺めていた。ムツ湾の水路の向こうの崖がはっきりと見えるようになると、彼は自分の軽いボートを押し出した。漕ぎ手の素早く確かなその腕の働きによって船は飛ぶように走り、彼は既に崖の頂上から彼に向かって手を振っている女が見えるほど向こう岸に近寄っていた。それは前夜から彼の帰りを待って見守っていたマウダであった。その日の曙光は、高みに立つ彼女の周りを戯れ始め、ウイクシィは姿を認めたしるしに空中に高く權を突き上げた。その刹那マウダが大きく、突き刺すような叫び声をあげて崖の先端から走りだした。岩や土砂の一部が崩れて砂浜に落ち、舞い上がる埃の雲が逃げて行く女の姿を覆い隠した。次の瞬間、ウイクシィは巨大な波頭の上に持ち上げられ、急降下する鷲のような速度でそのまま崖の表面に叩きつけられた。

大地の最初の震動によって目が醒めたアカランの老人たちはこの一部始終を目撃していた。ほとんどは頭を振るのみだった。しかし戦時族長は厳肅さを装ってこう告げた。「チャカイイが打ったんだ。古い秩序はそのまま残るんだ！」

N.C. ネルソン¹⁷⁾

参考文献

1. 和文のもの

アッシャー, R. E. / モーズレイ, クリストファー編 『世界言語地図』 土田滋 / 福井勝義 / 福井正子訳, 東洋書林, 2000年

阿部珠理 『アメリカ先住民の精神世界』 NHKブックス, 1995年

『新英和大辞典第6版』 研究社, 2002年

2. 英文のもの

Sipley William F. “Native Language of California”, from *Handbook of North American Indians*, Vol.8., edited Robert F. Heizer, Smithsonian Institution, Washington, 1978, 80-90

付記：本訳稿はエルシー・クルーズ・パーソンズ編著 / 神徳昭甫訳 「北米インディアンの生活 (8) —23部族の伝承と習慣」 『富山大学人文学部紀要』 (第43号, 2005年8月) の続編である。

17) N. C. Nelson. アメリカの人類学者。原著の分担執筆者。生没年は不明。以下の論文がある。Shell-mounds of the San Francisco Bay Region (University of California Publications in American Archaeology and Ethnology, vol. VII, No. 4. 1909.)